

近江町内中世遺跡における流通拠点としての特質

藤本史子

はじめに

近江町は、琵琶湖の東岸に位置し、古代から畿内と北陸・東国を結ぶ水陸共に交通の要衝に位置づけられる。そして、現代においても、東海道本線・東海道新幹線・北陸自動車道など日本の主要幹線が町内を通過



- | | | | |
|-------------------|------------------|------------------|-----------------|
| 1 長沢関跡 (長沢) | 9 長門寺遺跡 (顔戸) | 17 日光寺砦遺跡 (日光寺) | 25 寺倉遺跡 (寺倉) |
| 2 土川湖底遺跡 (長沢・宇賀野) | 10 顔戸山砦遺跡 (顔戸) | 18 多和田哨砦遺跡 (多和田) | 26 地頭山城遺跡 (寺倉) |
| 3 遠藤屋敷遺跡 (宇賀野) | 11 粉井屋敷遺跡 (顔戸) | 19 安能寺遺跡 (能登瀬) | 27 西円寺遺跡 (西円寺) |
| 4 三田村屋敷遺跡 (宇賀野) | 12 安養寺遺跡 (顔戸) | 20 中村屋敷遺跡 (能登瀬) | 28 西円寺遺跡 (西円寺) |
| 5 世継遺跡 (世継) | 13 浄蓮寺遺跡 (顔戸) | 21 能登瀬城遺跡 (能登瀬) | 29 太尾山城遺跡 (西円寺) |
| 6 法勝寺遺跡 (高溝) | 14 新庄遺跡 (新庄・箕浦) | 22 青木館遺跡 (能登瀬) | |
| 7 狐塚遺跡 (高溝) | 15 箕浦市場遺跡 (箕浦) | 23 宮ノ前北遺跡 (能登瀬) | |
| 8 飯村館遺跡 (飯) | 16 日光寺山砦遺跡 (日光寺) | 24 宮ノ前遺跡 (能登瀬) | |

図42 近江町内中世遺跡分布図

しており、日本の交通史上重要な位置を占めてきたことは明白である。水上交通の拠点としては、町内を西流する天野川の河口部に位置する古代からの要津である朝妻湊があげられる。この朝妻湊へ集められた北陸・東国からの物資は、湖上水運により京へと積み出されていった。延喜式にも記されている塩津（滋賀県伊香郡）・海津（滋賀県伊香郡）・勝野（滋賀県近江高島市）とならんで朝妻は古代からの主要な湊であった⁽¹⁾。近世になると朝妻湊は、慶長年間（1596～1615）に米原湊が成立し、大打撃を受け、その後衰微していくことになるが、それまでは湖東第一の湊と位置づけられていた。

また陸路としては、鎌倉期以降とくに東国から京への主要道となった東山道と北陸への街道の分岐点は、町内の飯・箕浦辺りと推定されている⁽²⁾。そして、近世の北国街道が湖岸沿いに南北を通るが、古代・中世においても人や物資の動きはあったと考えられる⁽³⁾。先述した朝妻湊について、古代から中世にかけての盛期期には、朝妻湊に着いた人・物資は、箕浦・新庄・能登瀬を経て、樋口あたりで東山道に合流していたことも、文献史料などから推定される⁽⁴⁾。

このように近江町内が交通の要衝であることは周知の事実であり、文献史料から、交通の要衝であることを解説した記述は多く認められる。そして、考古学においても、弥生・古墳時代、古代に関しては、遺跡・遺物から流通拠点としての特質を示した記述は認められるが、中世に関しては、これまで遺跡・遺物からこの問題に言及した記述はほとんどみられなかった。

そこで、本稿ではこのように交通の要衝に位置した近江町の中世における流通拠点としての特質の一端を示すことを目的とする。その方法として、まず、町内の遺跡・遺物を検討したうえで、地籍図など歴史地理的な手法も援用し、町域内における水陸の交通路を再確認するとともに、課題とした近江町内における流通拠点としての特徴的な事象を抽出してゆきたいと思う。また、時代的には、原始から現代に至るまで、交通の要衝であることは一貫しているが、鎌倉に幕府が開かれたことにより、東国と京との連絡路として東山道がより重要性を増したという歴史的状況を踏まえ、中世を中心に検討する。

現在、近江町内遺跡分布図において中世遺跡として27遺跡が認知されている（宮崎1995 38-40頁）。そして平安時代を含む遺跡が9遺跡、その他として明確な時代が記されていないが、中世も含む可能性がある遺跡が41遺跡確認される。平安時代とされる遺跡やその他とされる遺跡の中には中世遺跡も含まれる可能性はあるが、図42として作成した近江町内における中世遺跡の分布図は、中世と分布図で確認されている遺跡に限った。ただし、長沢関遺跡と宮ノ前遺跡の2遺跡については、その他に含めず中世遺跡に含めた。

1 近江町内における中世の主要交通路（図43）

(1) 陸路

① 東国への交通路

東国への交通路として東山道は秋田城へ達する古代の一級駅路であったが、中世になり、鎌倉幕府により、美濃から尾張を結び東行する東海道の駅路制定以後、京・鎌倉を結ぶ主要道としてさらに重要性が高まった。

また、東山道は湖上交通との結節点として、朝妻湊と関連があり、大津・坂本・堅田・八坂・朝妻そして東山道へというルートも史料に見られる⁽⁵⁾。

② 北陸への交通路

古代、京から若狭・越前などへ向かう北陸への交通路は北陸道と呼ばれ、琵琶湖西岸地域を北上するルートをとる。この古代北陸道に対し近世北国街道は中山道の下矢倉より分岐して湖東を北上して越前へ抜ける道である。しかし、中世段階においてもこの交通路が湖西の北陸道とともに重要視されていることは、たとえば「長沢」に関所が設けられ、興福寺大乘院の使者が関銭を払っている史料や、京極氏・浅井氏・六角⁽⁶⁾

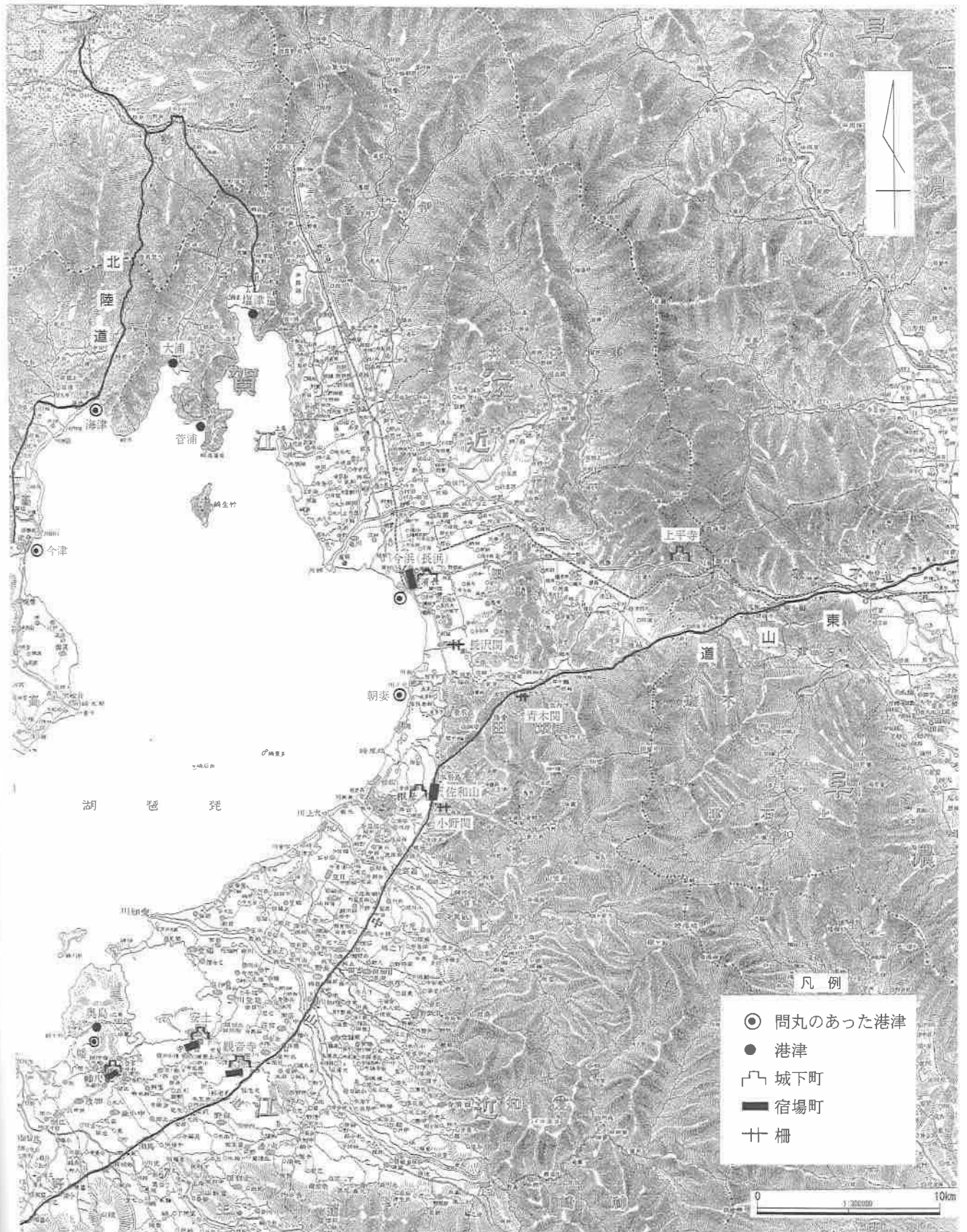


図43 湖東・湖北の中世主要交通路・港津（足利1981を参照、関については筆者加筆）
 （輯製20万分の1図復刻版名古屋（明治19年）・岐阜（明治21年）を合成・縮小）

氏さらには織田信長等の権力闘争に巻き込まれ、湖北から湖南の武家勢力の戦闘の際に拠点としてこのルート上に各陣の拠点が置かれ、交通路として重要視されていたことから明らかである。たとえば、天文七(1538)年、六角定頼が湖北の京極高広・浅井亮政軍を攻撃した際の陣立て書には、北攻めへの拠点として長沢に六角氏の本陣・同御馬廻衆を置き、東からの備えとして後陣は箕浦・能登瀬に置いたことが記されている。⁽⁷⁾

(2) 港津

① 湖東における中世の港津

中世において湖北から湖東にかけて位置した主な港津として、海津・大浦・菅浦・塩津・今浜(長浜)・朝妻・奥島・八幡があげられる。また、その中で問丸があった港津は海津・今浜・朝妻・八幡である。⁽⁸⁾

この中でも朝妻湊は、近世になって米原湊へ中心が移るまで、古代から中世にかけては湖東における中心的な湊であったとされるが、これは先述したように近江町地域が京都・奈良・北陸・東海をつなぐ陸路の交叉地点であったことが理由としてあげられる。つまり、陸路と湖上交通路の結節点に位置する湊として、重要性が高かったと推察される。

② 朝妻湊(世継)の位置づけ

港津を復元するにあたり、汀線を復元する必要があるが、この点については、出土遺物・遺構の存在、地形図、字名、絵図などが参考となる。

朝妻湊は朝妻庄法勝寺郷に属し、『近江輿地志略』には朝妻村は、「筑摩村の北にある村なり。此地古昔は湖東の大湊にして往来の船必此處にかゝりて繁昌すといへ雖」とあり、地誌などからも湖東の中心的湊であったことがわかる。「近江国坂田郡筑摩社并七箇寺之図」(坂田神明宮所蔵、文明六(1474)年)(近江町史編さん委員会編1989 124頁)によると、息長川(天野川)を挟んで朝妻の対岸に世継が描かれており、安政三(1856)年の「便覧図蹟」では同位置に「四木」とある(図44)。朝妻と世継はいずれも天野川河口部に位置しており、広義の朝妻湊とは天野川河口部の湊(朝妻・世継)を指したのではないかと思われる。

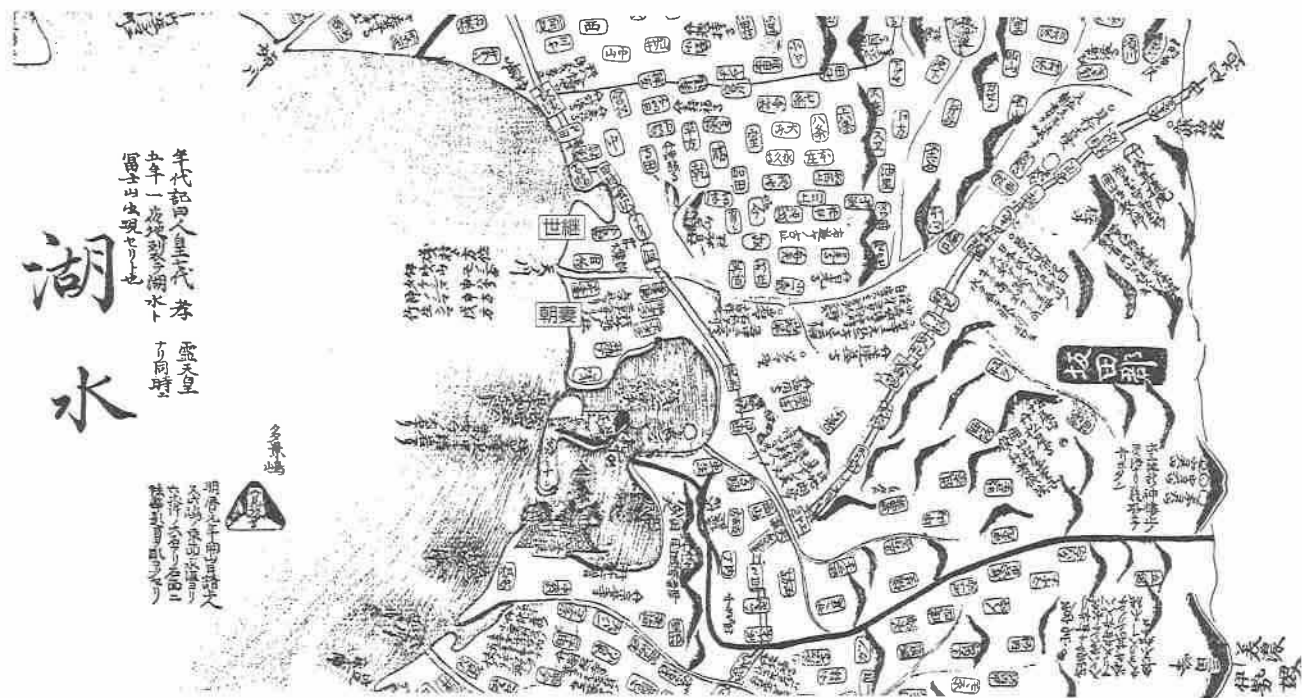


図44 絵図に記された世継・朝妻湊(「便覧図蹟」(安政三年)による)

近江町は、天野川の沖積作用によって発達した三角州と氾濫原からなっているが、世継遺跡付近は浜堤上に位置しており、朝妻湊は潟港であったと考えられる。中世の港に関しては、入江状の地形を利用した船泊り的な施設だったと考えられている。また、天野川については、北の姉川河口部と比べ三角州の発達が小規模である。この理由として天野川の方が下流へ粉砕物が供給されにくいことがあげられる。この特質も潟湊として有利な地形条件といえる。

世継遺跡の調査成果として船泊り的な遺構は検出されていないが、遺物として、10世紀前半の灰釉陶器碗(折戸53型式)が出土している。碗の底部外面には「穴」「貝」の墨書がみられる。同時期から近江地域において灰釉陶器が一般化する傾向があり、導入期の遺物といえる。

また、奈良火鉢獣脚も出土しており、これは15世紀と考えられ、漆継ぎの痕跡が見られる。

土師質土器の小皿は茶褐色を呈し、器壁が厚い在地タイプの製品が出土している。

2 東国への推定交通路周辺に位置する集落

中世後期集村化以降の集落は現在の集落と重なる例もあり、考古学で個別の中世集落を特定することはむずかしい。そこで、集落を構成する小字名を調べ、小字名に含まれる古代・中世の歴史関連地名や中世遺跡の存在をてがかりに、中世集落を推定し、集落の位置を大正9(1920)年の地形図に示した(図45)。

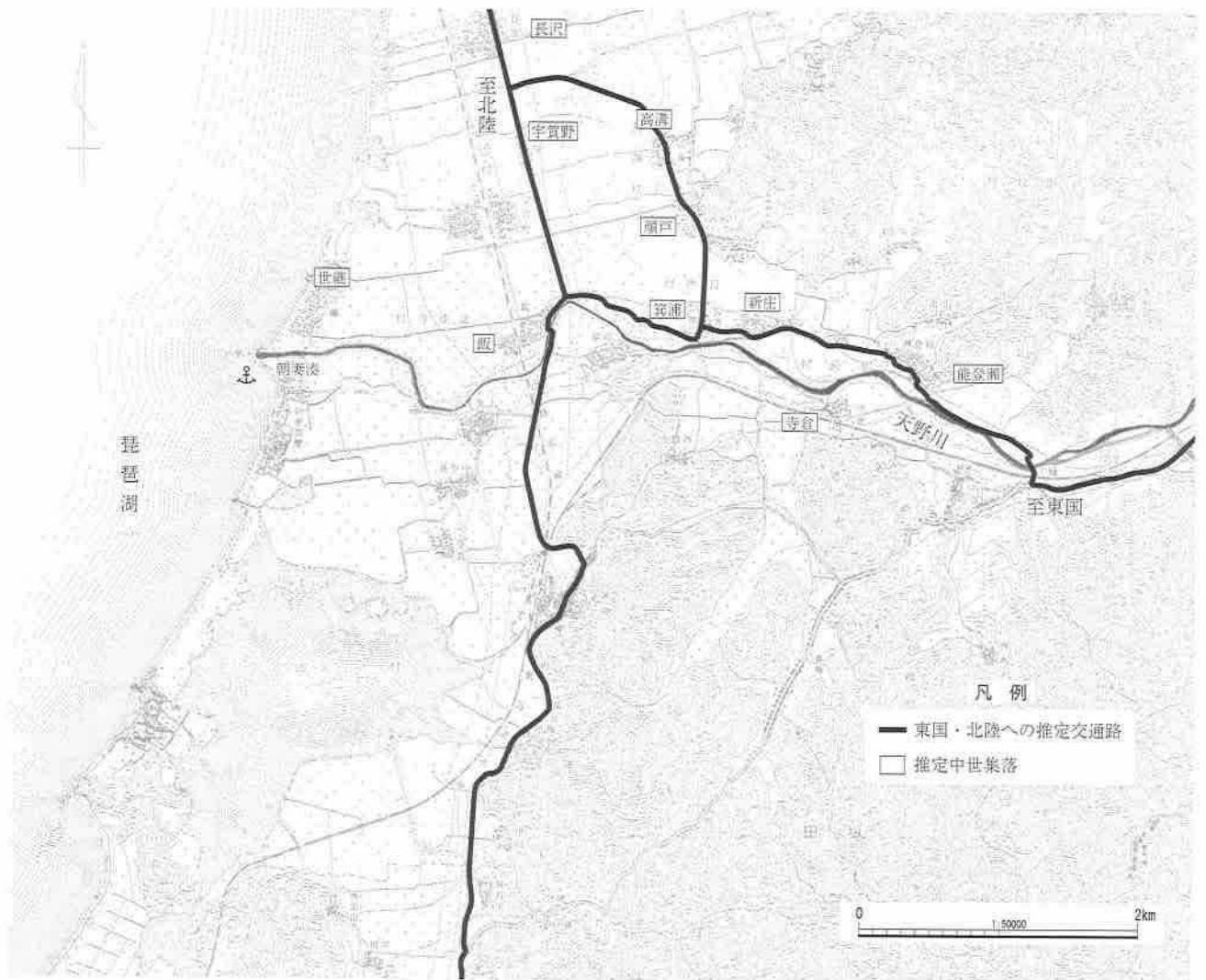


図45 中世における東国・北陸への推定交通路と集落(基礎図は大日本帝国陸地測量部大正9年測図)

(1) 飯

① 小字⁽⁹⁾

飯は、東川原・堀町・黒土・閑入田・久田二・十二條町・小一條町・内嶺原・外出原・味噌内・角田・六ノ坪・神子作・松田・尻腐・伊勢地町・金光寺・森下・小山・横田・野田・奈良ノ木・地蔵・北寺内・田門・横枕・南寺内・城堂替・長塚・北鹿替・南鹿替・内湯倉・向川原・丹後町・久保田・澤・多奈川原・下川原・折戸・柳ノ木町・苗代・堂ノ前・堂ノ西・堂ノ東・中瀨天・大將軍・居堂・小性房・柳ノ内・前川原・ヒ俣・外湯倉・石丸・東川原・奥ノ森の合計58の小字からなる。小字名には条里関連の名称と考えられる十二條町・小一條町・味噌内・味噌内・六ノ坪などの小字も目立つ。

② 飯廃寺遺跡群

飯には、飯廃寺遺跡群として正恩寺・普明庵・地蔵堂の3遺跡が認知されている。この遺跡からは山田寺式単弁八葉蓮華文軒丸瓦が採集されており、灰釉陶器、山茶碗も大量に採集されることから、寺院跡群の下限は平安後期と考えられている。昭和62年度調査では、正恩寺遺跡の中心部の調査が行われ、白鳳時代の柱穴群と瓦が検出されている。正恩寺遺跡出土平瓦の中で、凸面は長軸を側縁に平行させる斜格子叩き、凹面は布目痕を残し、酸化炎焼成で褐色を呈する平瓦I類（B類）については、三大寺（米原町枝折）・法泉寺遺跡（山東町本郷）で同形の叩き板で作られた平瓦が見つかっており、平瓦の一部については、天野川流域がひとつの流通圏になっていたことが指摘されている（図49-22・23）（北村1987）。また、山田寺式軒丸瓦が同じく正恩寺遺跡・法勝寺遺跡（近江町高溝）・三大寺遺跡から出土している。

③ 川湊

近世には、北国街道の川渡し場が飯にあったとされ、町内の個人宅には、元禄二（1689）年の『川越賃定

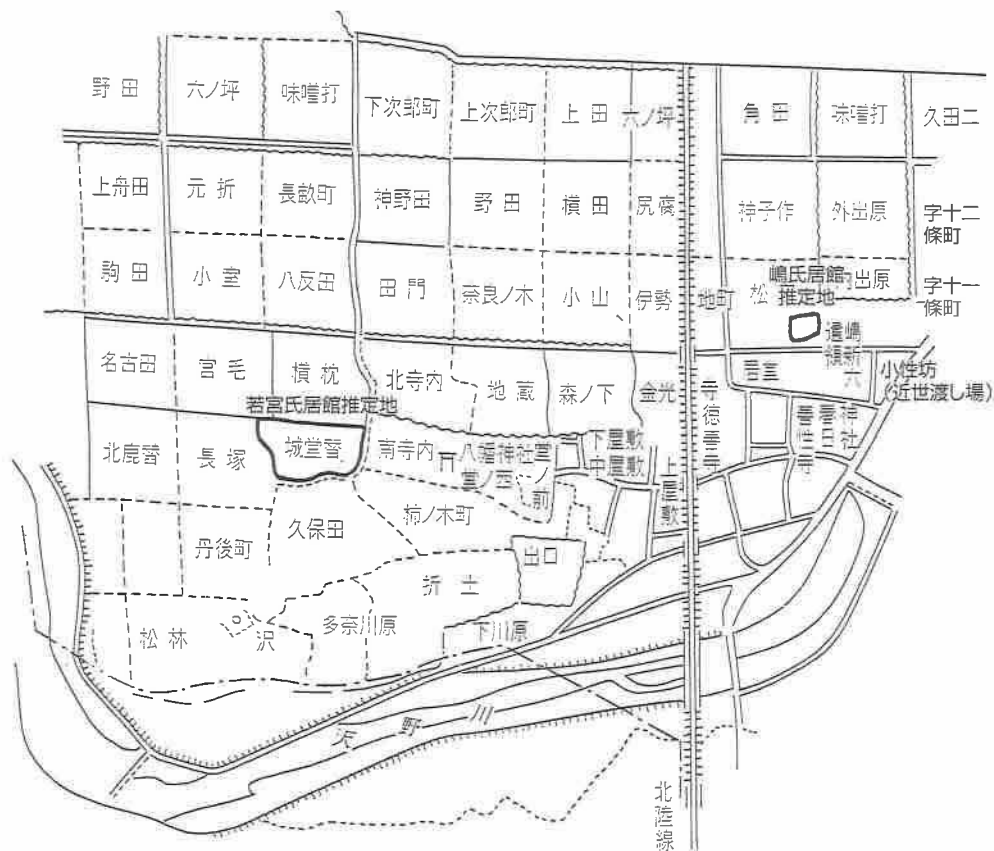


図46 若宮氏・嶋氏居館推定地

之事』の掲示板が残されている⁽¹⁰⁾。この位置は、字小性坊あたりと推定される（図46）。

④ 国人の居住地

国人の若宮氏、今井氏重臣の嶋氏も飯に居館を構えたとされる。現在、発掘調査で居館跡などの検出例はないが、若宮氏の居館は先述した小字名の中で、天野川沿いの地点の「城堂替」付近が候補とされる。また、嶋氏の居館は、先述した川湊西側に比定されている（第46図）。

(2) 新庄・箕浦

① 小字

新庄は、上川原・若宮・土橋・上口・定納・上口・保田・北白川原・塚ノ越・南白川原・中川原・外川原・大正寺・横田・綾ヶ崎・中川原・岡ノ山・中川原・白川原・堂ノ内・弁慶石・下川原・川原口・北小路・的場・城ノ内の合計26の小字からなる。この内、城ノ内は方形微高地上に位置しており、今井氏居館の推定地である。

箕浦は、中西・荒木・川原口・立町・替添・坊ノ西・栗毛・小角・桑ヶ田・黒田・下川原・大川原・中川原・外川原の合計14の小字からなる。この内、「立町」は「館町」であり、今井氏家臣団館があったことが伺える小字名であり、「中西」は今井氏同族である今井中西家政の屋敷があったと考えられている。

図47に地籍図（城ノ内（新庄）・的場（新庄）・中西（箕浦）・立町（箕浦））の合成図を掲げたが、城ノ内の北西地点が新庄城跡とされる（網掛け部分）。そして、小字名から新庄・箕浦に広がるこの地域が今井氏および家臣の居住域と推定される。的場の東、立町の西は「川原口」の小字名で、南には天野川が流れており、



図47 新庄城跡付近地籍図

（中西（箕浦）・立町（箕浦）・城ノ内（新庄）・的場（新庄）明治後期作成地籍図を合成）（網掛け部分新庄城跡（箕浦城跡））

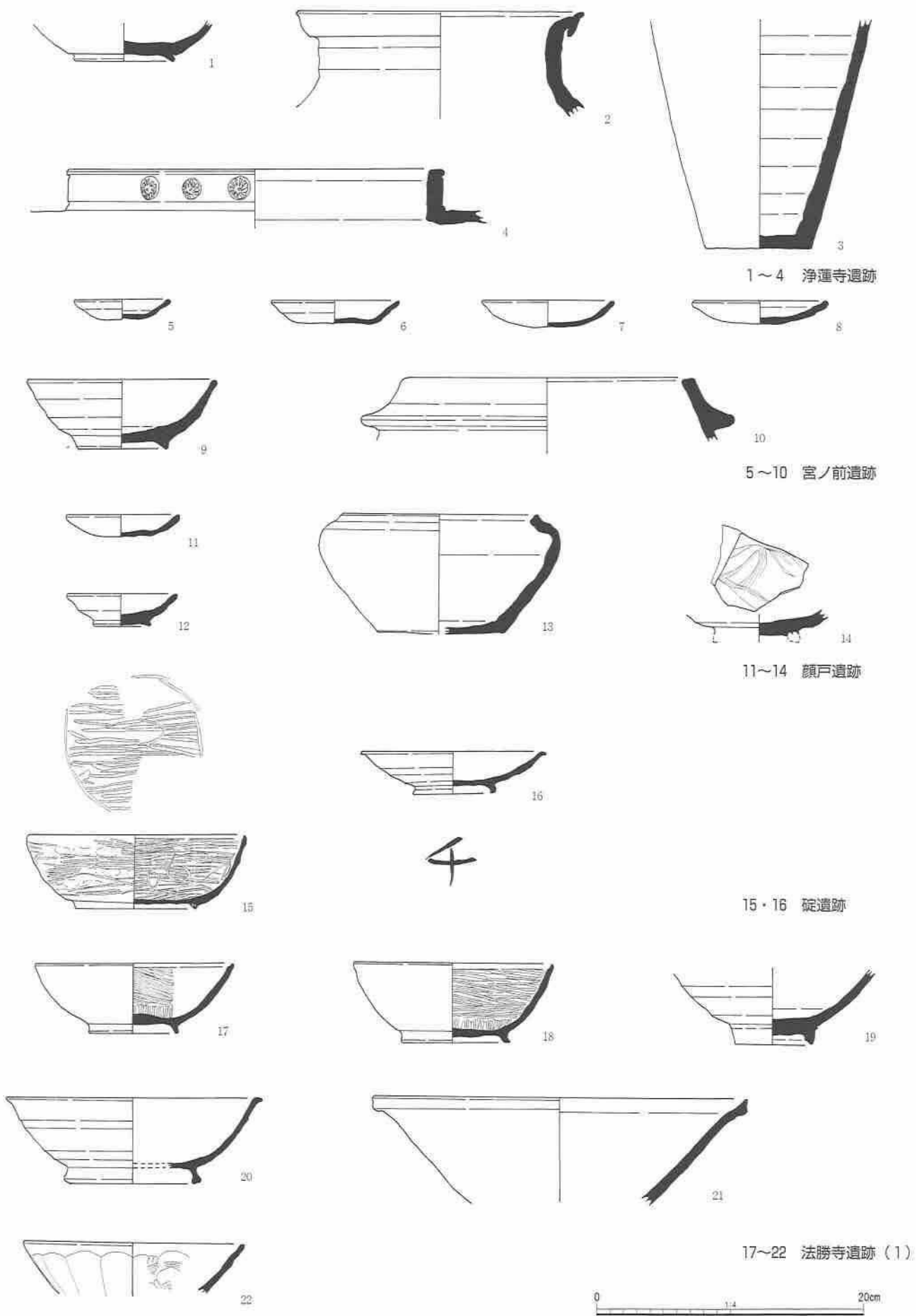
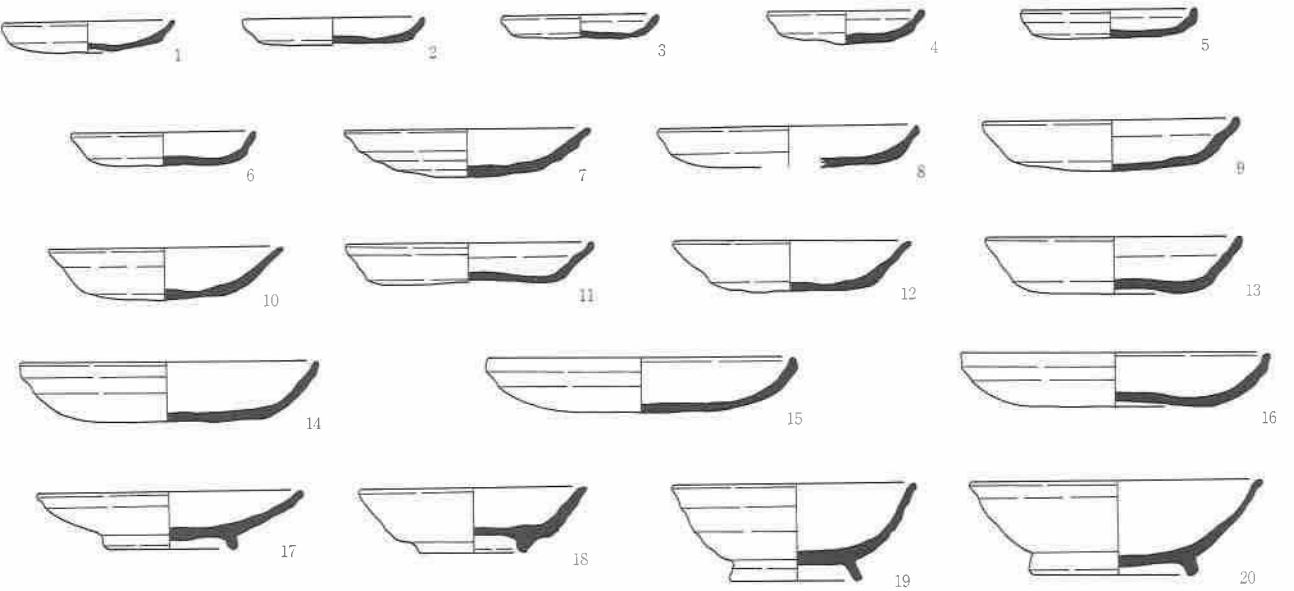
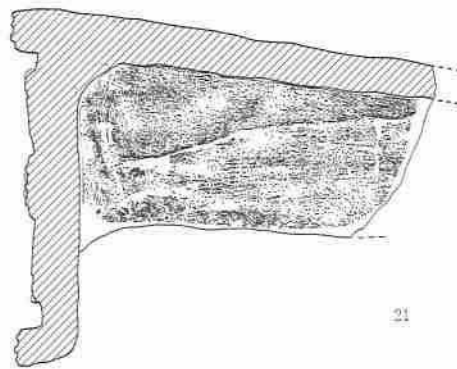
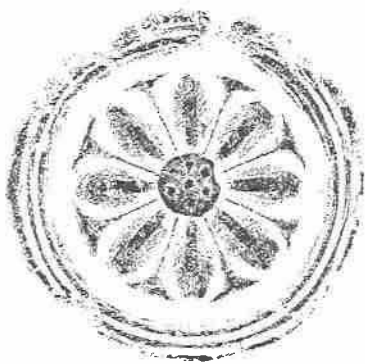


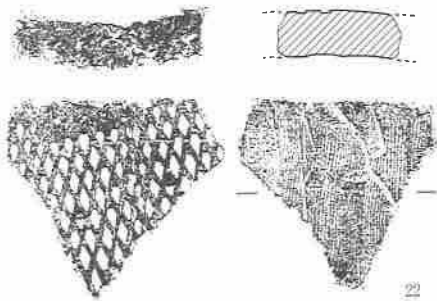
図48 東国・北陸への推定交通路周辺遺跡出土遺物実測図(1)



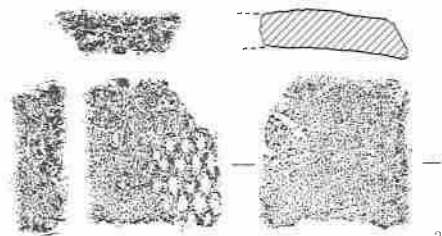
1~20 法勝寺遺跡(2)



21



22



23

21~23 正恩寺遺跡

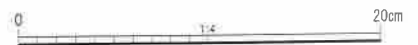


図49 東国・北陸への推定交通路周辺遺跡出土遺物実測図(2)

天野川沿いに立地している集落であることがわかる。城ノ内の東には、現在も地蔵堂が位置する。地蔵堂は「井戸村文書」文明三(1471)年条「二斗八日市端(場)の地蔵堂へ」という文言から、八日市場にあったとされる(近江町史編さん委員会(編)1989 248-249頁)。

② 新庄（箕浦）城

新庄（箕浦）城の城主は、近江町内における最大の国人今井氏である。その規模は南北120m、東西200mの城館と考えられており、遺構としては新庄・箕浦城遺跡第1次調査において、堀の一部（幅5m、深さ0.8m）が西側方向へ約15m検出され、堀沿いに溝・柵列もみつかり二重堀構造を呈している。その他柱穴も検出し、掘立柱建物が復元されている。遺物としては、土師質土器皿・漆器・中国製磁器・北宋銭が出土している。

新庄・箕浦城遺跡からは、ほ場整備関連調査においても瓦質土器の火舎、瀬戸の灰釉天目茶碗・播鉢・盤、土師質土器皿などの中世遺物が出土している。瓦質土器は口縁部外面に菱形文を印刻した製品や、体部外面に唐草文を刻んだ製品など15世紀と考えられる。瀬戸の灰釉天目茶碗は内面全体と体部外面2分の1に灰釉を施し、外面無釉部分は削り、内面底部には2ヵ所胎土目痕が残る。

また、先述した小字城ノ内の北側に位置する浄蓮寺遺跡、小字中西北西の埋塚遺跡からも、中世の遺物が出土している。浄蓮寺遺跡の遺物は、旧顔戸川の埋め戻し作業に使用された浄蓮寺遺跡内の土砂から採集されており、4点掲げた（図48-1～4）（宮崎1991b）。1は12世紀の南部系山茶碗の底部である。2はN字形口縁部を呈する常滑焼の口縁部で、13世紀後半と考えられる。3は古瀬戸の瓶で、13世紀後半頃の製品である。4は瓦質土器風炉の口縁部であり、口縁部外面には菊文を印花する。14世紀末～15世紀前半と考えられる。奈良火鉢が形態・外面の文様ともに発展した時期の製品である。

(3) 能登瀬

① 小字

能登瀬は、上川原・宮ノ前・西川原・西代・北込・大郷・福山・御屋敷・向山・奥深・高尾・乙井・オホギ・前川原の合計14の小字からなる。オホギは「青木」で、山津照神社の故地であり、現在は青木神社が位置している。山津照神社は中世には「青木大梵天王本社」と称され、明治15（1882）年に現在の社地に移転した。

② 宮ノ前遺跡

宮ノ前遺跡は、先述した山津照神社の故地正面に広がることから名称がつけられている。畑地を中心として平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物散布が認められており、周辺を描いた絵図に、養生寺・定応寺・雲好庵の3つの寺名が認められることから、平安時代後期以降の寺院関係遺跡とされる（宮崎1991a 3頁）。

長老墓地川改修工事に関連した宮ノ前遺跡第2次調査において、12世紀後半～13世紀にいたる遺構群が検出されており、建物跡・井戸などをとり囲む大区画溝も検出されている。遺物の一部を図48-5～10にあげた。5～8は土師質土器の皿で、口径は5.2cm～10cm前後である。8は口縁端部をつまみあげる特徴を持つ。6は2段ナデ調整を施す。9は山茶碗である。ハの字形に開く高台を有し、口縁端部は丸く収める。

図化していないが、輪花口縁を呈する山茶碗も出土しており、12世紀中頃と考えられる。10は瓦質土器の羽釜である。口縁部端面に段をもつ河内・和泉型の形態を呈す。瓦質土器羽釜の出土量は、湖南に比べて湖北では激減することが指摘されている（宮崎1991a 11頁28-29行目）。

3 北陸への推定交通路周辺に位置する集落

(1) 宇賀野・高溝

① 小字

宇賀野は東碓・西碓を含む110の小字からなる。高溝は、31の小字からなる。法勝寺に関連する小字名およ

びその他寺院関連の小字名は確認できない。

② 碓遺跡（宇賀野）・法勝寺遺跡（高溝）（図48・49）

碓遺跡は、集落としては宇賀野に属するが、法勝寺遺跡・狐塚遺跡・奥松戸遺跡とともに法勝寺遺跡群を構成している。古墳時代から奈良時代にいたる複合遺跡とされるが、平成12年度末～平成13年度初頭にかけて実施された第4次調査において、平安時代後期の畿内系黒色土器A類碗や灰釉陶器碗が出土している（図48-15・16）。黒色土器は、器形については後出する在地系黒色土器が碗形を呈するが、碓遺跡出土遺物は杯形を呈しており、畿内との関係を示す遺物といえる。灰釉陶器皿は三日月高台を有し、底部内外面には施釉せず、口縁部から体部外面にかけてつけ掛けする。底部外面には「千」と墨書痕がある。猿投窯折戸53号窯式に相当しており、10世紀前半の年代が与えられる。同型式の製品が世継遺跡からも出土している。

法勝寺遺跡は、南北480m、東西450mの規模をもつ縄文～中世までの複合遺跡である。白鳳時代を中心とする寺院跡からは、白鳳～平安時代にかけての瓦が出土し、礎石も点在する。しかし本稿では中世を中心とした遺物を取り上げた（図48-17～22、図49-1～20）。図48-17・18は畿内系黒色土器Ⅲ類の碗である。口縁端部内面に段をもち、体部外面はナデ調整を施す。また、ハの字形に開く高台を特徴とする。17は器高がやや浅く杯形に高台を付したタイプで、18は口縁端部から内底面にかけて深いタイプの製品である。19・20は灰釉陶器、21は東播系須恵器の練鉢である。13世紀初頭の神出窯の製品である。近江町内ではこの他にも寺倉遺跡から13世紀の東播系須恵器の練鉢が出土している。22は龍泉窯系の青磁碗である。体部外面には蓮弁文を施し、内面には劃花文を施す。12世紀中～後半にかけての製品である。

図49-1～16は土師質土器の皿である。大きく口径が5cm前後のタイプ、7cm前後のタイプ、8cm以上のタイプに分類される。器壁が比較的薄く、2段ナデ手法（7）、口縁面取り手法が目立つ（5・8・15）。京都系土師皿のAタイプに属する製品が多い（伊野1987）。また、図化していないが1988年に行われた法勝寺遺跡の調査では、口径10cm前後で白色系を中心とする土師質土器の皿が40点近くまとまって出土している。

この他にも口径13cm前後の中皿、16cmの大皿が報告されており、一段ナデ手法、2段ナデ手法と両手法が認められるが、平安京内で出土するような明瞭なナデは認められない。

17～20は山茶碗タイプの皿と碗である。12世紀の南部系山茶碗である。

(2) 顔戸

① 小字

顔戸は140の小字からなる。その中には「甲塚」、「後別当」、「黄牛塚」、「日撫山」など古墳の名称や、「勝正寺」、「不明庵」、「円光寺」、「佛光寺」、「安養寺」、「浄蓮寺」、「恵林庵」、「正光寺」など寺院の存在を示す名称も残る。

② 顔戸遺跡・黄牛塚古墳

今回、図48-11～14に掲げたのは顔戸遺跡第2次調査出土遺物である。11は土師質土器皿で口縁端部外面は面をもって立ち上がる。12は山茶碗タイプの皿である。ベタ高台で体部から高台部への変化点にくびれを呈し均質手で北部系山茶碗の特徴を持つ。13は越前焼の鉢である。北陸系の出土遺物は、常滑焼など東海系の出土遺物と比較すると多くはない。14は龍泉窯系青磁碗である。内底面に印刻が施される。なお、この遺物は、高台が欠損した底部のみの扁平な形状をしている。これは円板状製品の可能性がある。円板状製品は面子などの玩具としての性格、あるいは祭祀用品としての性格も考えられる。

この他図化していないが、黄牛塚古墳の石室内からも中世遺物が出土している。胎土がやや粗く、畳付部分に粉殻痕を残す南部系山茶碗、7型式の常滑焼甕の口縁部、瀬戸・美濃陶器の天目茶碗、龍泉窯系鑄蓮弁文青磁碗など出土遺物の時代幅は13世紀～16世紀までと広い。

おわりに

近江町内における交通路、中世遺跡の様相を確認してきた。ここではその内容をまとめておきたい。

まず、東国への推定交通路周辺に位置する飯・箕浦・新庄・能登瀬の各遺跡から出土した遺物をみると、奈良火鉢や羽釜などの瓦質土器製品、灰釉陶器、南部・北部系の山茶碗、常滑焼の甕など畿内・東海系の遺物などが認められる。東海系の遺物については湖東地域では特殊な遺物ということはないが、瓦質土器製品は湖南と比べ、湖北では出土数が少ない土器であり、畿内との結びつきが考えられる。また、飯遺跡においては、古代ではあるが天野川流域を流通圏とする平瓦が出土しており、天野川を交通手段として利用したことが伺える。限られた資料からであるが、これらの遺跡においては、遠隔地からの遺物が一定量出土している。

また、新庄・箕浦遺跡においては国人領主の館跡が検出されており、堀囲いの館であったことが確認される。飯遺跡においては遺構として検出されていないが、小字名などから、国人嶋氏・若宮氏の屋敷跡が推定されている。いずれの国人館跡も天野川沿いに位置しており、さらに、先述した遺物の出土状況からも交通路に位置した集落として考えることも可能である。これまで、中世の文献史料に基づき、箕浦に関しては八日市場の存在から市の開催地であること、源頼朝が箕浦に宿泊したことから、箕浦を通る交通路が中世東山道のひとつのルートとして示唆されていたが、今回検討した出土遺物の搬入土器の様相や、国人領主の館跡が位置していたことなどから、交通の要衝に位置した集落であることが追認できた。

朝妻湊との関連で考えられる世継遺跡からも畿内産の瓦質土器が出土しており、北陸への推定交通路周辺に位置する碓遺跡においても出土している灰釉陶器は古代ではあるが、近江地域において導入期の製品であり、世継・碓遺跡においては東海からいち早く製品が搬入されていることになる。

そして、古代・中世にはどのようなルートとして機能していたのか明確にされていない北陸への交通路については、碓遺跡・法勝寺遺跡・狐塚遺跡・奥松戸遺跡を含む法勝寺遺跡群、長沢遺跡など北陸への推定交通路周辺に位置する遺跡から畿内産の黒色土器A類、楠葉産と考えられる黒色土器B類など9～11世紀にかけての畿内からの搬入土器や、12世紀末～13世紀の東播系須恵器練鉢などが出土している。東播系須恵器練鉢は東国への推定交通路に位置する寺倉遺跡からも出土している。これらの遺跡からは、周辺遺跡と同様の灰釉陶器・山茶碗など東海系の遺物も出土しており、東国への推定交通路周辺に位置する遺跡と同じく搬入土器を一定量含むことを特徴とし、この交通路が中世において機能していた可能性は高く、このような状況下で長沢関も設置されたと思われる。

土師質土器皿に関しては、各遺跡から出土しているが、新庄・箕浦城跡から出土している皿には、へそ皿タイプや、褐色系で厚手の在在系タイプが目立つ傾向に対し、法勝寺遺跡出土の皿は白色系で、京都系Aタイプの口径10cm前後の小皿が目立つ。この土器様相は法勝寺遺跡という寺院跡、新庄・箕浦城跡という城跡及びそれに伴う集落跡といった出土遺跡が示す性格による違いと考えられるが、今後発掘調査が進展し、中世の出土土器様相がなおいっそう明らかになれば、北陸への交通路周辺に京都系土師質土器皿の出土比率が高いなど、近江町内における交通路別の土器様相の違いとして認識されることになるかもしれない。また、畿内系搬入土器に関しても、9～11世紀の畿内系搬入土器は北陸への交通路周辺に認められるが、東国への交通路周辺の畿内系搬入土器は12世紀末～15世紀にかけての東播系須恵器練鉢や瓦質土器などが中心を占める。

これまでの出土遺物の様相から、東海系の遺物が湖東・湖北に一定量搬入されるという事実は、近江町のみではなく、湖東・湖北周辺遺跡においても明らかである。しかし今回近江町内から出土した遺物を検討した結果、東海系の遺物に関しては、灰釉陶器の折戸53型式の早い導入や、畿内との強い結びつきが認められた。また、搬入土器の時期に関しては北陸への交通路周辺では古代末・中世前期から畿内系土器が認められ

ることに対し、東国への交通路周辺では中世前期～後期の火舎や羽釜など瓦質土器を中心とする搬入土器が目立つことも特徴のひとつといえる。

最後に北陸系土器について触れておきたい。今回近江町内の出土土器の中で取り上げたのは、顔戸遺跡出土の越前焼鉢1点のみである。北陸系土器については、湖南と比べ湖北では出土量が多いという認識があるが、今回確認したところ、貯蔵具としては、東海系の常滑焼の甕、東播系須恵器甕、信楽焼などの破片が目立った。中世においても近江町内においては北陸への交通路が機能していたことを示したが、北陸と湖北・湖東との流通問題に関しては、今後の検討課題としたい。

今回は検討資料が少数で、結論付けるには早計であるが、中世における近江町内の流通の特質を一部ではあるが明らかにし得たのではないかと考える。今後も資料を集積し、検討を加えることにより、詳しい様相を解明できると考える。また、先述したように中世後期に関しても近江町内は、京極氏・六角氏・浅井氏を中心とした紛争において、湖北における重要な戦略拠点となっており、人の動きとともに、物流も盛んであったと考えられる。しかし、本稿では中世後期の様相についてほとんど触れることができなかった。

同じく、柵・砦・城郭の検討なども近江町域の交通の要衝としての重要性を示すものと考えますが、今回は地図上に地点を示すにとどめた。これらの問題に関しては今後の課題としたい。

本稿をなすにあたって、近江町内の遺跡の状況に関しては近江町教育委員会宮崎幹也氏からご教示いただき、町内各遺跡の資料実見に際しては、滋賀県教育委員会内田保之氏、財団法人滋賀県文化財保護協会中川治美氏にご配慮いただいた。記して感謝いたします。

註

- (1) 『延喜式』巻26主税上（新訂増補国史大系 延喜式 中篇）
- (2) 「此の地より東へ一直線に飯村を経て箕浦へ通じる道路あり。箕浦は古へ東山・北陸両道の分岐点にして繁華の地なりき」と記し、「保元物語」や「吾妻鑑」を引用し、東国と京への道筋に箕浦があることを示している（坂田郡教育会(編)1975a 501頁5-11行目）
- (3) 『大乘院寺社雑事記』文明十一年七月二六日条（増補 続史料大成 大乘院寺社雑事記七）
- (4) 朝妻湊は天曆四（950）年「東大寺封戸莊園并寺用帳」、永祚元（989）年「尾張国郡司百姓等解」などの史料から、朝妻湊には東海からの官物・貢納米などが東山道を経て集められていることがわかる（近江町史編さん委員会(編)1989 91-92頁）。前掲註（2）で記した箕浦・飯を経た東国への交通路を推定すると、朝妻湊で荷揚げされた物資は、樋口あたりで本流の東山道と合流したと考えられる。
- (5) 鶴崎裕雄・福田秀一 校注 1990 「藤河の記」（『中世日記紀行集』岩波書店）
- (6) 前掲註（3）
- (7) 『朽木家古文書』（近江町史編さん委員会(編)1989 206頁）
- (8) 足利健亮作図「中世交通図」を参照した（足利1981 1220頁）。
- (9) 小字名について、能登瀬・宇賀野・高溝は近江町史編さん委員会(編)1989に拠り、それ以外は天津地方法務局長浜支局保管地籍図（明治後期作成、平成6年再製により閉鎖）に拠る。
- (10) 元禄二(1689)年 飯村川「川越賃定之事」と記された横188cm、縦39cmの木板（飯、成宮大蔵氏所蔵）（近江町史編さん委員会(編)1989 425-26頁）。
- (11) 光嚴院院宣（山津照神社所蔵）（近江町史編さん委員会(編)1989 172頁）。

参考文献

足利健亮 1981 「中世交通図」『角川日本地名大辞典』25 滋賀県 角川書店

- 伊野近富 1987 「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 財団法人京都府埋蔵文化財研究センター 395-407頁
- 近江町史編さん委員会(編) 1989 『近江町史』 近江町役場
- 兼康保明・稲垣正宏 1987 「坂田郡近江町世継遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XIV-3 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1-29頁
- 北村圭弘 1988 「坂田郡近江町正恩寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XV-1 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 33-36頁
- 小島捨市編輯 1915 『近江輿地志略』
- 坂田郡教育会(編) 1975 a 『改訂近江國坂田郡志』第一卷
- 坂田郡教育会(編) 1975 b 『改訂近江國坂田郡志』第二卷
- 坂田郡教育会(編) 1975 c 『改訂近江國坂田郡志』第三卷
- 新城常三 1967 『鎌倉時代の交通』 吉川弘文館
- 千田 稔 1974 『埋れた港』 学生社
- 戸田芳実 1992 『歴史と古道』 人文書院
- 長浜市史編さん委員会 1996 『長浜市史』第1卷 湖北の古代 長浜市役所
- 宮崎幹也 1990 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』XVII-1 法勝寺遺跡 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 宮崎幹也 1991 a 『宮の前遺跡』近江町文化財調査報告書第7集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 b 『埋塚遺跡』近江町文化財調査報告書第8集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 c 『埋塚遺跡2』近江町文化財調査報告書第9集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991 d 『礎遺跡2』近江町文化財調査報告書第11集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1993 『西円寺遺跡』近江町文化財調査報告書第16集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1995 『近江町埋蔵文化財調査集報』1 国庫補助事業「町内遺跡発掘調査報告書」 近江町文化財調査報告書第18集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2001 a 『近江町埋蔵文化財調査集報』3 一町内遺跡発掘調査報告書一 近江町文化財調査報告書第21集 近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2001 b 『近江町埋蔵文化財調査集報』4 一礎遺跡 第3次発掘調査一 近江町文化財調査報告書第22集 近江町教育委員会

挿図出典

- 図42 宮崎1995、38-40頁を参照 藤本作成
- 図43 足利1981を参照、一部加筆 藤本作成
- 図44 「便覧図蹟」(部分)に一部加筆 藤本作成
- 図45 大正9年測図に一部加筆 藤本作成
- 図46 近江町史編さん委員会(編)1989、251頁に一部加筆 藤本作成
- 図47 「中西」・「立町」・「城ノ内」・「的場」地籍図を合成 藤本作成
- 図48 1~4 (宮崎1991 b、14頁第10図を改変トレース) 5~10 (宮崎1991 a、10頁第8図を改変トレース) 11~14 (宮崎1991 b、26頁第22図を改変トレース) 15・16 (藤本実測・トレース) 17・18 (宮崎1990、58頁第45図を改変トレース) 19~22 (宮崎1991 b、25頁第21図を改変トレース)
- 図49 1~20 (宮崎1990、58~60頁 第45~47図を改変トレース) 21 (北村1988、図版八を改変トレース) 22・23 (北村1988、図版九を改変トレース)